

癒しの錯視

北岡 明佳

大学に行くと、心理学という学問がある。以前はこころの実証的研究が心理学の主流であったが、近年は病める社会からの要請を背景に、臨床心理学が勢力を伸ばしている。臨床心理学の目的は、心理療法やカウンセリングを通して、こころを病んだ人がこころの健康を回復することを援助することである。

巻で「癒し」ということばがブームになったことがある。「癒し」そのものは臨床心理学の用語ではないが、こころの傷からこころの健康をやさしく回復させようという志向性を持つ点で、心理療法やカウンセリングの目

指しているところと重なっている。

ところで、筆者は実証的心理学者で、錯視（目の錯覚）の研究者である。そのため、錯視についていろいろな意見を頂戴することが多い。その中に、「錯視図形は癒しに应用できるのではないか」と提案される方が時々いる。そういう方が選ぶ錯視は「中心ドリフト錯視」である。図は中心ドリフト錯視を应用した作品で、リングが時計回りにゆっくり回転して見える。

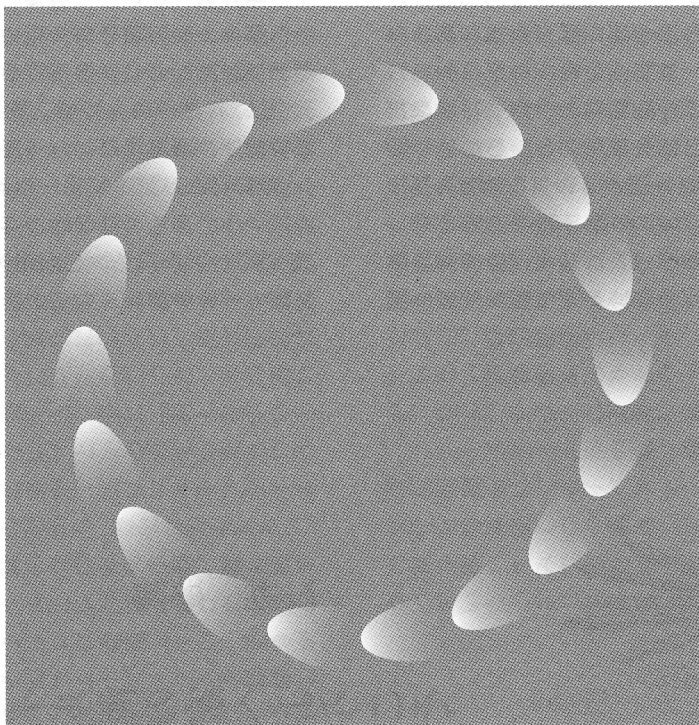
中心ドリフト錯視は、明るさのコントラストの低いところ（ボートの尻）から高いところ

（ボートの先端）に向けて動きが感じられるという現象である。メカニズムはまだわかっていない。ただ、何もしなくても「ゆっくり回転して見える」ということと、図のコントラストが低くて目にやさしい点が、「癒し系」の 카테고리に入れられる理由ではないかと思う。

もし将来、この錯視には本当に癒し効果があると実証されるようなことがあれば、すばらしいことである。

きたおか・あきよし

立命館大学助教授



筆者作「ボード」。リングが時計回りにゆっくり回転して見える。印刷の関係で錯視量が少ないようであれば、筆者のホームページ (<http://www.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/>) もご覧頂きたい。